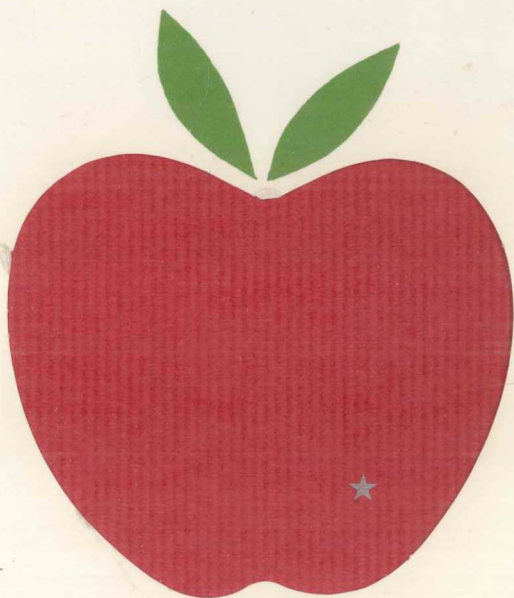


ビツグアップル



殺人事件

海老名美どり

ビッグアップル殺人事件

紐育

ビッグアップル殺人事件

平成3年11月18日 初版発行

著 者 海 老 名 美 どり
発 行 者 村 川 修 二 郎
印 刷 所 松 濤 印 刷 株 式 会 社
 太 陽 印 刷 工 業 株 式 会 社
製 本 所 大 日 本 製 本 株 式 会 社

発行所 ㊤104 東京都中央区京橋3-5-7 株式 主婦と生活社
 会社
振替東京0-36364 電話 販売部 03(3563)5121 編集部 03(3563)5135

落丁本・乱丁本は当社でお取り替えいたします。

© Midori Ebina 1991 Printed in Japan

ISBN4-391-11410-0

※本書の内容を小社に無断で複写複製することを禁じます。

ビッグアップル殺人事件 目次



第1章	赤いマニキュア	5
第2章	エキサイティング“ビッグアップル”	23
第3章	ニューヨークタイムズのヒーロー	45
第4章	幸子を襲った黒い影法師	65
第5章	ハーレムのブラックキラ	83
第6章	地下鉄に呑み込まれた日本女性	101

第7章	ジュライフォース	121
第8章	金縁サングラスの男	143
第9章	次のターゲットは夕子	165
第10章	解読された数字	187
第11章	フェアウェル・パーティのアクセシデント	207
第12章	「アイミスユー」	231
*エピローグ		250

BOOK DESIGN & ILLUSTRATION
by
TAKESHI KITAMURA
Design Room

第1章 赤いマニキュア



寒いわ——幸子は思わず左手で右の腕を撫でた。赤いマニキュアの指先が光る。東京駅から「成田エクスプレス」に乗り込むため、五反田の駅へ向かって歩きだした。

胸が痛い——去年の今頃だったわね。あなたと初めて会ったのは……。



赤いマニキュアがつけてみたくて、化粧品屋さんに行ってみたの。あの頃は勇気がなくて、結局、私の買ったのは店員さんが選んでくれた、1500円のダークな肌色のマニキュアだった。会社の制服には合いそうな色だけど、本当は赤い色が欲しかった。心のどこかで、冒険してみたかったの。

ミニスカートにゴールドをつけて、芝浦ジュリアスで、「ダンス ダンス ダンス」してみた！「HOME BOY」と恋したい！

でも、バスルームの鏡に映る顔は、どう見ても「味噌汁ニョウボ女」。

住んでいるのもマンションとは名ばかり。二日も窓をしめていると、たんすの後ろにカビが生えてきそうなアパートなの。バスルームというよりは風呂場の鏡もひびが入って、うっすら黒ずんできている。

そうだ、女性雑誌にこだわってみよう。それで夜のコンビニに行ってみた。

午前二時半。小雨が降っていたけど、一目散に自動ドアに向かい、マニキュアのコー

ナーに直行した。

(欲しかった赤い色、あった！ 900円)

いいわ。これで私も一步前進よ。ささやかだけどノーブルなことがしたかったの。うれしくてドキドキしながらレジに向かったのに、金曜日の夜中は混んでいて長い列のいちばん後ろ。私の後ろに、誰か背の高い男の人が並んで、背中越しに声をかけてきた。

「混んでますね」

「え!!」

「僕、こういうの苦手だなあ……」

「え、ええ」

思わず下を向いてしまった。私ときたら地味な中途半端なスカートにTシャツ……なんでこんな格好で出てきたのかしら。初対面の男の人がせっかく声をかけてきてくれたというのに……。レジのお姉さんは、眠たいのか無愛想な顔して、のろのろ仕事をしている。そっと顔をあげると、やっと相手の顔が目に入った。

あっ、ステキな人！ 身長は180cmぐらいかしら。肌は浅黒く、二重瞼で、ポカリスエットとビールとナッツの袋を軽々と抱えている。

「あ、あのー、海で焼いたんですか？」

男の人に声をかけるなんて初めて。ふだんは知ってる人にだって話しかけられない私が、会社でもいい男の人がいると、まわりの女の子たちは争って声をかけ、約束してカフェバーなんかに行っているのに、私は一直線に家に帰ってきてしまおう。

誘われても、なんだか自信がなくて、本当は行きたいのに断ってしまう。だから、ボーイフレンドもないまま二十二歳。なんてつまらない女の子。

情けなくてビールを一缶飲んだら苦しくなっちゃって、タバコも吸ってみたけど、咳こむし……。シャネル、ベネトン、みんなの大好きなブランドも無関係。話も合わず、なんて淋しいんでしょう。

退社時刻直前の女子トイレは、まるでミュージカルが始まる5分前という感じ。それってわかるかしら？ 話題は、今日誰と寝るとか、誰とやってみたいとか、ナンパの仕方、最近の男の子の好きな色、ファッション etc。

会社の前の通りには、みどりさんを待っているセリカ、ときにはボルシェ。彼女は会社の社長のお坊ちゃまとつきあっているのよ。すごいボディコンで、真っ赤なルージュ、ロングヘアーはフィッシュボーンにまとめて、黒のハイヒールでコツコツとリズムカルに歩く。クレージュのストッキングネックのリボンがチャームポイントよ。

私だってああなりたいけど、ほとんどバーゲンで揃えた私のファッションはちぐはぐだ

し、ヘアーは無造作に一束にまとめただけ。どう見てもあか抜けない。



「こんな時間に買い物ですか？」

「え、まあ、マニキュアを握りしめた手のひらに、汗がジットリたまってくる。

「この近くに住んでいるんですか？」……幸子、ずいぶん大胆にしゃべってるじゃない！

「ええ、この通りの信号を越えたところですよ」

「ちょっと待って、それじゃ私と同じ方向だわ」

「そうですか、じゃあ、途中まで一緒に行きましょうか」

「は、はい」

レジのお姉さんは相変わらず眠そうな声で事務的に声をかける。

「消費税を入れて927円です」

「あ、はい」

自動扉の外に出て、彼を待つ。胸が高鳴ってどうしたらいいかわからない。手も震えている。きれいな月がほほえんでいた。

「やあ、お待たせ！」

「いえ、いいんです」

「いやね、女の人ひとりじゃ危ないですよ」

月明かりが二人の背中をやわらかく照らしてくれている。通りの角まで来た。

「ありがとうございます。もうここで大丈夫です」

「いいですよ。僕、今日はひまだから家の前まで送りますよ。ついでだし、近くだから」

「私、家じゃなくて、アパートに住んでいるんです」

「それじゃ、なおのこと送るよ」

「じゃ、甘えていいですか」

なんて早く着いてしまうのかしら、もっと一緒に歩きたかったのに。彼、横顔もステキ。無言のまま、並んで歩き、家の前まで来ると、「ありがとうございます」のたった一言で別れてアパートの階段を上がった。この間の胸の中の葛藤はとても人には説明できない。

（どうぞ上がってください。お茶でも一杯）

なんて言いたいの、とても言えないわ。

彼も、「じゃあ」と、さわやかな顔を残して去っていった。

呼びとめたいの。でも女のほうから誘うなんて、はしたない。きっとこのことを会社の知子に話したら、「バカね、なんでもっと食いさがらなかつたのよ。本当に幸子はバカんだから。せっかくのチャンスを棒に振って、まるで子供みたい。私だったら、ドアを

開けて、どうぞって入れちゃうのに」って言われるでしょうね。でも、いつかきつと、あの人とはまた会える気がする。せめて、名前だけでも聞いておけばよかった。

あわててカーテンを開け、窓から顔を出して彼の姿を必死に探した。もうかなり向こうに、黒い小さな後ろ姿があった。



次の週の金曜日にもコンビニに行ってみた。いない。当たり前よ。べつに彼は私のことなんかなんとも思っていないんだから。

その次の週の金曜日にも、赤いマニキュアをつけ、美知子に言われたようにちょっとミニのスカート、ベネトンのマークの入った、胸の谷間がのぞくキャミソールを着て、コンビニに行く。なんにも買いたい物はなかったけど。

いた！ 彼がいた。前よりももっと小麦色の肌になって。

「この間は、どうもありがとうございました」

「君、変わったね。見間違いかと思ったよ」

「少しは夏っぽくしてみたかったです。ずいぶんお会いしなかったけど、ますます焼きましたね。どこかへ？」

「え、そうですか。バイトしてたからかな。もちろん会社の仕事のほかにね、友達に頼ま

れてサーファーショップの研修につきあったんですよ」

「わあ、かっこいい！」



赤いマニキュアを買ってから、私もずいぶん変わった。この間は、美知子に誘われて、芝浦のディスコのハシゴをしたの。生まれて初めての体験だったわ。

花金はなぎんの夜9時に全員集合。みんな着替えを朝からロッカーに入れておいて、思い思いの格好で集まったというわけ。

「幸子、相変わらずダサイわね」

ふだんなら、面と向かってダサイなんて言われたら、いくら私でもカーッとくるのだけれど、なんとなくうれしい気分なので聞き流している。それにしても、みんなすごいボディコン。いつもはパンツルックのボーイッシュな礼子まで、なにそれ、すごい超ミニじゃない。私は、渋谷で、もちろんバーゲンで買った花柄のおとなしいワンピース。

六人グループは、ワーワー騒ぎながら、目標のディスコに向かった。人一倍騒いでいるのが、いつも会社では目立たない可奈子。まったく、花金になると、みんな性格まで変わっちゃうのかしら。

来るわ、来るわ、男女入り乱れて集まってきて、行列はどんどん長くなっていく。

「混んでるわね、どうする？　ここはあとまわしにしようか」、世話係の美知子の声に全員の気分はいっそう盛りあがる。

私の好きなタイプ……ノータイプ……やさしい人だったらそれでいい。飾らなくて、気持ちがよくて、一緒にいて疲れない人。そんな男の人はいないかしら。二千人も人間が右往左往している。入り口では、もう入場制限が始まったようだ。

私たちの終ろに、Gパン、Tシャツの男の子グループがいた。

「お客様、申し訳ございませんが、混んでまいりましたので入場制限させていただきます。おります」。ノーネクタイの方はお断りですって、はっきり言ってやればいいのに、なんて遠まわしに言うのかしら。

「なんだ、へえーっ、Gパンじゃだめなのかよ。行こうぜ」

今までの湘南ボーイ風おすまし男たちが、突如、声色を変える。うんうん、こういうのは追い出すべきよ。

大きな鏡の扉の向こうには、何があるんだろう。チケット＝男子5500円、女子5000円。ちょっと高いけど、六人分のチケットを受け取り、足もとから照明の当たる、ゆるやかなカーブの道を進んでいく。

次の大きな扉が現れる。まるでテーマパークの中に入っていく感じ。扉が開いたその瞬

間、あっと驚いた。

わあ、なんという別世界！　すごいわ、やっぱりファッション雑誌に書いてあったとおりよ。圧倒されるようなムードに、すっぱり呑み込まれるような気分て、初めてだわ。

お立ち台で踊っている子、ボディコンスーツがピタリきまって、かっこいい。しなやかな脚、華やかな扇子を片手に、軽いダンスのリズムにのって、自信たっぷり。

しだいにみじめな気分にとらわれる。それなのに踊る人の波に押されて、私はあつという間にダンスフロアに転がり出てしまった。仕方なく、慣れない手つき、身振りでリズムに合わせて踊りはじめる。

あたりを見回しても、私のことなんか見ている男の子など一人もない。それはそうよ。誰だって、この世界でいちばん冴えない、もやし娘なんか目に入るわけないわ。

女の子の主流はパニオンレプリカタイプや、ワンレンボディコン娘なんだから。

男はコースト派かな。高級なアイテムをわざと着くずしていたりして。いたいた、背の高いさわやかな顔だちの男の子。私はああいう人が好きなの。冴えないワイルドキッズはきらい。Gパンの裾がすり切れていたり、へたなサファリ男はいや。

あの人の近くに行きたいけど、今日はみんなと一緒だから個人行動はやめよう。でも、ついつい、目がいつてしまう。背は高いし、イタリア男っぽい高い鼻、すっきりした目